

東アジアプロジェクトの成果と課題

柳静我*・柳原邦光*・岸本覚*・久保堅一*
・稲津秀樹*・小村幸基**・垣屋知里**

Achievements of East Asia Project and Challenges for the Future

YU Jeungah*, YANAGIHARA Kunimitsu*, KISHIMOTO Satoru*, KUBO Kenichi*,
INAZU Hideki*, KOMURA Kouki**, KAKIYA Tisato**

キーワード：港湾都市、都市開発、人の移動、諸文化の混雑、景観、越境

Key Words: port city, urban development, the movement of people, mixed state of various cultures, landscape, beyond boundaries and frameworks

I. はじめに

鳥取大学地域学部地域文化学科／国際地域文化コースでは、2年間（2014～2015年度）の準備過程を経て2016年度に「東アジアプログラム」をスタートさせた。これにより「東アジアで語学力と現地感覚をもって活躍できる人材を育成するプロジェクト」（略称：「東アジアプロジェクト」）の形がほぼ整った。「東アジアプロジェクト」は、学生が海外プログラムなど様々な企画への参加経験を通して言語・文化・歴史などを学び合い、相互理解や交渉に必要な語学力・学術的な知識・現地感覚を身につけるとともに、地域認識と感覚を東アジアという広域的な地域に拡張することを目指している。具体的には、鳥取大学で諸大学の学生と教員を迎えて行う「東アジアプログラム」、海外での「中国プログラム」（廈門大学人文学院）、「韓国プログラム」（スタート時点では翰林大学校人文大学日本学科、現在は梨花女子大学校人文科学部史学科）、「台湾地域調査」（高雄師範大学台湾歴史文化及語言研究所）がある！

なお、東アジアプロジェクトにはもう1つ柱がある。「東アジア研究」である。その内容は以下の通りである。国内と海外（中国、香港、台湾、韓国）から研究者を招聘し、講演会・研究会・シンポジウムを開催すること（2015～2019年度で合計24名を招聘）、「語学・歴史・文化・地域」研修及び調査や講演・シンポジウムを記録し、その成果を地域学部の

紀要である『地域学論集』に掲載すること（これまで5編の論考を掲載）、将来、研究蓄積を活かして報告書あるいは書物の形で成果を出版することである。これまでのプロジェクトで達成した成果については、地域学部が構想している地域学にできるかぎり組み込んできた。

本稿では、2018年度と2019年度の「東アジアプログラム」を中心に2016年度以降4年間の東アジアプロジェクトを振り返り、その成果を検証して、今後の可能性と展望について考えたい。

以下、最初に両年度の「東アジアプログラム」の概要を簡潔に紹介する。次に2019年度の講義内容を紹介して、プログラム全体として参加学生に何を提供できたのかを確認し、地域学としての成果を引き出すことを試みる。続いて「東アジアプログラム」以外の各プログラムの概要と小括から東アジアプロジェクトの全体像を提示する。そうした上で、すべてのプログラムに参加した地域文化学科の4年生2名のコメントから東アジアプロジェクトが参加学生にとってどのような経験だったのかを確認する。最後に、以上を踏まえて、「むすび」として、本稿の目的である、東アジアプロジェクトの成果と課題を検証し、今後の可能性と展望について述べる。（柳静我）

II. 2018年度と2019年度の「東アジアプログラム」の概要と特徴

1. 両年度プログラムの日程と概要

最初に東アジアプログラムの日程を紹介する。

*鳥取大学地域学部地域文化学科国際地域文化コース
**鳥取大学地域学部地域文化学科地域創造コース

2018年度東アジアプログラム日程表

日付	内容
7/30	9:30 開校式 10:30~12:00 西岡千秋教授(音楽) 12:00~14:30 昼食・学校案内 14:45~16:15 木野彩子講師(ダンス)
7/31	9:00~11:30 日本語授業 小泉かさね教師 14:00~ 「 <u>弓道を学ぶ</u> 」(鳥取市弓道場)
8/1	9:00~11:30 日本語授業 13:00~14:30 岸本覚教授講義 15:30~17:00 岸本覚教授講義
8/2	10:00~ <u>茶道を学ぶ</u> (鳥取大学付属中学校茶道部) 13:00~14:30 稲津秀樹准教授講義 「 <u>港湾都市神戸の歴史・文化調査</u> 」 15:30~17:30 日本語授業
8/3	7:00~20:00 <u>神戸「港湾都市神戸の歴史・文化調査」(現地調査)</u> 稲津秀樹准教授案内
8/4	9:30~12:00 日本語授業 14:00~15:30 高雄師範大学呉玲青副教授 講演「開港場としての高雄の歴史と文化」 18:30~ 懇親会(教員)
8/5	10:30~12:00 日本語授業 13:30~17:20 シンポジウム(大会議室) 「東アジアにおける研究交流と人材育成」
8/6	9:00~17:30 「 <u>鳥取歴史・文化・建築・宗教調査</u> 」(現地調査、岸本覚教授案内)
8/7	9:00~11:30 日本語授業 13:00~17:00 「 <u>鳥取の自然環境を学ぶ</u> 」 (中尾雅之講師案内)
8/8	9:00~11:30 日本語授業 13:00~17:00 発表会(3430講義室) 18:00 閉校式(大会議室) 18:30~20:30 懇親会(大学生協)

2018年度は10日間の日程で実施した。日本語授業7回、「東アジアと海」をテーマとした「地域学」関係の講義・講演4回、参加教員によるシンポジウム1回、地域フィールド調査関係4回(そのうち終日が神戸と鳥取で計2回)を行った。海外からの参加は、厦門大学が学生9名と教職員2名、高雄師範大学、学生7名と教員2名、梨花女子大学が教員1名(招聘講演)、合計で学生16名、教職員5名である。

2019年度東アジアプログラム日程表

日付	内容
7/29	9:30 開校式(大会議室) 10:30~12:00 西岡千秋教授(音楽) 12:00~14:30 昼食・学校案内 14:45~16:15 木野彩子講師(ダンス)
7/30	9:00~11:30 日本語授業 小泉かさね教師 13:00~14:30 久保堅一准教授講義 『 <u>源氏物語</u> 』の世界 15:30~17:00 岸本覚教授講義「近世日本の政治と文化—三都と鳥取—」 18:00~ 学生食事会(湖山クラブ)
7/31	9:00~17:00 「 <u>鳥取歴史・文化・建築・宗教調査</u> 」(現地調査、岸本覚教授案内) 午前中 池田家墓地、宇倍神社 14:00~14:30 鳥取市歴史博物館学芸員・石井伸宏氏「東アジアと海—亀井茲矩を中心に—」(鳥取市歴史博物館) 15:00 鳥取東照宮見学 18:30 教員懇親会
8/1	10:30~12:00 香港中文大学文学院歴史系何佩然教授講演「香港の海港と土地開発」 13:30~15:30 今後に向けた協議 学生: <u>アニメ文化に関する調査</u> (「青山剛昌ふるさと館」)
8/2	10:00~ 「 <u>茶道を学ぶ</u> 」(鳥取大学付属中学校茶道部) 13:00~14:30 稲津秀樹准教授講義 「 <u>港湾都市・神戸概論</u> 」 15:30~17:30 日本語授業
8/3	7:00~20:00 <u>神戸「港湾都市神戸の歴史・文化調査」(現地調査)</u> 、ギンナン助教担当
8/4	〈午前〉前日調査のまとめ 〈午後〉「 <u>商業施設を調査する</u> 」「 <u>日本の風物を見る</u> 」(倉吉花火大会)
8/5	9:00~11:30 日本語授業 13:30~15:00 ギンナン助教講義 Asia and the Pacific 16:00~ 「 <u>弓道を学ぶ</u> 」(鳥取市弓道場)
8/6	9:00~15:00 「 <u>鳥取の自然環境を調査する</u> 」(現地調査:鳥取砂丘と浦富海岸) 15:00~16:30 日本語授業 以後:発表会準備
8/7	9:00~11:30 発表会準備 13:00~17:00 発表会(3430講義室)

18:00	閉校式（大会議室）
18:30～20:30	懇親会（大学生協）

2019年度も10日間で実施した。日本語授業5回、「東アジアと海」をテーマとした講義と講演5回、地域フィールド調査関係6回(そのうち終日が1回、神戸)である。海外からの参加は、厦門大学が学生7名と教職員2名、高雄師範大学、学生4名と教員1名、香港中文大学、学生3名と教員1名である(香港中文大学は2019年度が初めての参加)。合計、学生14名、教職員4名である。

2017年度同様、実施期間が学部の前期授業の最終週・試験期間と重なった。学生たちには大変申し訳なかったが、学年暦の関係で変更できなかった。それでも地域文化学科/国際地域文化コースの学生たちと、2019年3月の厦門大学での中国プログラムに参加した人間形成コースの学生3名が時間を見つけて参加し、サポートしてくれた。

両年度でプログラムの骨格に大きな変化はない。地域学のテーマも同じ「東アジアと海」である。検討の対象は主に港灣都市で、神戸、高雄、香港であるが、他の海外プログラムを含めれば、この3都市に中国の厦門と泉州、韓国の仁川が加わる。

違うのは、2019年度に香港中文大学からの参加があったことである。参加を実現するために次の準備を行った。大学から学長裁量経費(国際戦略経費)をいただいて、2019年3月18日～20日に香港中文大学を柳静我准教授と柳原邦光教授が訪ねた。文学院歴史学科の学科長をはじめ5名の先生方には、初対面にもかかわらず歓迎していただいた。キャンパス全体を見学した後、学部学科等について互いにプレゼンテーションをして情報交換した。東アジアプログラムについても、事前に作成した中国語説明資料をもとに協議することができた。

その結果、2019年度東アジアプログラムへの香港中文大学教員の招聘と学生の参加が決定した。招聘したのは、香港発展の歴史について講演していただきかったのと、参加体験を通して地域学部と東アジアプログラムについて正確な認識をもっていただきかったからである。今後は互いの信頼関係を深めつつ、学术交流協定と学生交流の覚書の締結に向けて協議を進めたい。

香港中文大学との関係が重要なのは、地域学部学生たちのなかに英語の力をつけることを切望する者、英語・中国語・韓国語など複数言語を学んでいる者や学びたいという学生が現れているからである。協

定と覚書を締結できれば、学生たちの希望をかなえることができる。それは視野を広げ、結果的に卒業後の進路選択も広げることになる。また、締結が難しくても、中国、韓国、台湾、香港と鳥取とを結ぶことで、東アジアの大学間ネットワークを完成できるからである。究極的には、東アジアプロジェクトが起点となって東アジアや東南アジアで語学力のハンデなしに多文化を尊重しつつ活動することのできる人材が生まれることを期待している。

2. 両年度のプログラムの特徴

次に両年度のプログラムの具体的な内容であるが、これまで発表した論考と重なる点は除いて、特徴のみを紹介したい。

2018年度の特徴は、「東アジアにおける研究交流と人材育成」をテーマに4大学でシンポジウムを開催したことである。第1部「4大学の現状報告」では、厦門大学の陳永福氏と呉芸氏、高雄師範大学の呉玲青氏と王本瑛氏(招聘)、梨花女子大学校鄭恵仲氏(招聘)、鳥取大学地域学部は筆者(柳原邦光)と学生3名(小村幸基さん、垣屋知里さん、藤縄望さん、言語は中国語)で報告した。第2部「今後の方向性を探る」では、柳静我准教授の司会で意見交換した。シンポジウムを通して分かったのは、なんといっても企画者・参加者の熱意、楽しみながら互いを尊重し支え合おうとする、自ずと生まれた態度、大学・学部の支援である。そしてこれらがプログラムを支え進化させたことである。素晴らしい協力関係であるが、当初はこのようなことが実現するとは思ってもみなかった。今でも不思議である。

こうした関係が生まれた背景には次の点も関係しているかもしれない。プログラムに参加している教員と学生の多くは歴史学が専門である。それにもかかわらず、歴史学にとどまらず、地域学部の構想する「地域学」の観点からテーマを設定してきた。このことがプログラムの内容を豊かにし、質を高めているように思われる。身近なところから、しかし大きな視野にたって考えることができる。それが楽しいのである。

なお、シンポジウムと議論の内容については、シンポジウム後に参加者で共同執筆した次の論考に実質的に盛り込まれているので、興味のある方はご覧いただきたい。柳静我・柳原邦光・岸本覚・稲津秀樹・小泉かさね・呉玲青・李曉紅・陳永福・呉芸、2019、『東アジアプログラム』と東アジア『越境人』の育成2』『地域学論集』第15巻第2号、65-81頁である。

次に、2019年度プログラムである。2018年度に続いて「東アジアと海」をテーマに設定して、歴史学・社会学・文化交流論・国文学の4分野からテーマに迫った。

具体的には、テーマに直接関係しているのは、香港中文大学文学院歴史系何佩然教授の「香港の海港と土地開発」、稲津秀樹准教授の「港湾都市・神戸概論」、ギンナン助教の“Asia and the Pacific”である。「東アジアと海」で想定していたのは東シナ海や日本海であるが、ギンナン氏の講義は日本・中国とカナダ、とりわけ港湾都市であるバンクーバー市との太平洋を介した関係を論じて、視野を東アジアの海域をこえて大きく広げた。また、久保堅一准教授『源氏物語』の世界」と岸本覚教授「近世日本の政治と文化—三都と鳥取—」は、鳥取市歴史博物館学芸員・石井伸宏氏「東アジアと海—亀井茲矩を中心に—」とともに、日本と中国大陸との歴史的文化的関係を扱っている。これらの講義の地域学からみた成果については「Ⅲ-6.『地域学』としての成果」で述べる。(柳原邦光)

Ⅲ. 2019年度講義・講演の概要

ここでは2019年度に講義・講演を担当した教員がその内容を手短かに紹介する。なお、香港中文大学何佩然教授の講演の場合、地域学部教員が要約した。

1. 久保堅一 『源氏物語』の世界」

『源氏物語』の世界」と題して、『源氏物語』の概要と、首巻である桐壺巻のストーリー、そして、桐壺巻と中国(漢)の歴史書『史記』との比較について講義をおこなった。

『源氏物語』を扱った理由は、この物語が平安文学ひいては日本の古典文学の最高峰の一つであり、また、多くの漢籍を撰取して成立している作品でもあるからである。『源氏物語』を例として、古代文学が海外の知識—古代東アジア共通の教養である漢文—を受容して創作されていたことを受講生たちに理解してもらおうというのが狙いである。

講義内容は、まず『源氏物語』の成立した時代や作者・紫式部などについて説明したのち、人物系図や内裏図などを利用して、桐壺巻のストーリーを説明した。その後、〈桐壺帝—桐壺の更衣—弘徽殿の女御〉という主要な人物関係が、司馬遷『史記』に記される〈劉邦(高祖)—戚夫人—呂后〉の関係を踏まえて創作されていたことについて講義した。

最後に、古代の文学は多くの漢籍を取り込んで創

造されていること、文物や文化はそうした混淆のなかで形作られていたことなどを述べて、講義を締めくくった。

2. 岸本覚「近世日本の政治と文化—三都と鳥取—」と現地調査

2019年7月30日の私の講義は、近世日本の基本的な政治構造を理解してもらうことを目的とした。まず、将軍と藩主についての基礎知識を、徳川将軍と鳥取藩主との関係を事例に説明した。藩主という存在が、いかに将軍との関係で成り立っていたのかを理解してもらうためである。続いて、同様の趣旨で武家諸法度に基づいて継続された参勤交代の意義を概略した。

そして、大名の近世日本の「首都」にあたる「三都」(江戸・大坂・京都)とそれぞれの鳥取藩邸について解説した。江戸は、政治都市であり最大の消費都市でもある。諸大名は、上屋敷・中屋敷・下屋敷・抱屋敷など多数の藩邸を構えて、将軍への謁見、諸大名との交流、妻子の生活などを行っていた。とくに江戸における各大家の藩邸の、江戸城との距離などを取り上げて、将軍を取り巻く諸大名の構造的な仕組みを示した。大坂は「天下の台所」と呼ばれる全国の物資の集積地である。諸大名はここに蔵屋敷において領内の米穀などを換金するなどした。京都は、天皇と公家が居住する空間であり、宗教・諸芸の中心的な場所でもあった。

三都とあわせて、大名の城下町の実態を、鳥取城下町を事例に紹介した。城下町の基本構造として武家・商人などの居住区域があったことなどを紹介した。また、将軍への忠誠を形として見せる東照宮の存在など城下町の宗教施設についても説明した。そして、江戸時代の地誌・名所図会などを通じて、いかに地域の名所が形成されていったのかを概説した。



史跡鳥取藩主池田家墓所の見学

以上の講義を踏まえて、翌7月31日現地調査を行った。当日は、池田家墓地、宇倍神社などを巡った。毎年、両地の案内は、沖廣俊さん（公益財団法人 史跡鳥取藩主池田家墓所保存会）にお願いしている。沖さんは、先代から40年以上にわたって池田家墓地を守ってきた方である。近世日本の基礎的な概要を踏まえ、午後からは、鳥取市歴史博物館（やまびこ館）で学芸員石井伸宏氏に「東アジアと海—亀井茲矩を中心に—」と題して講演をいただいた。鳥取の歴史をひもとくと、実は世界とつながっていた、あるいは世界とつながろうとした人物がいた。今回のテーマに最適な人物として亀井茲矩を紹介していただいた。近世日本のイメージは「鎖国」に象徴されるが、近世初期においては多様な交流のあり方が存在していた。日本海側の一大名に過ぎない亀井家も、世界を見据えた展開を考えていたのである。



鳥取市歴史博物館での講演会の様子

以上全体を通じて、日本近世史全体の枠組みから鳥取の歴史と文化を理解してもらうとともに、今年度のテーマ「東アジアと海」に関わるテーマについての認識を深めてもらうように努めた。

3. 何佩然（香港中文大学文学院歴史系教授） 「香港の海港と土地開発 1840～1930年代」

何佩然教授の講演内容については、柳静我が講演原稿を翻訳し、それをもとに柳原邦光が要約文を作成した²。

(1) 講演の目的

香港は19世紀中頃から貿易の仲介地として台頭したが、地理的な位置に恵まれていたことが発展の重要なポイントとされてきた。しかし、19世紀の都市計画と香港島の発展をみれば、19世紀の香港（香港島）が絶え間なく投入された人的資源、科学技術、

自然障害を克服しようとする努力に支えられて発展してきたこと、大自然と闘って今日の都市発展の基礎を作ったことがわかる。このプロセスを明らかにすることが講演の目的である。

(2) ヴィクトリア・ハーバーの立地

最初に地理的条件を確認すると、香港島のほとんどが山地である。北岸と南岸に細長い海岸低地があるだけで、発展可能な平地は非常に少ない。香港島の都市としての発展は、清がアヘン戦争に敗れて香港島をイギリスに割譲した19世紀半ばに始まる。当時、貿易は主にジャンク船に頼っており、遠洋船も喫水が浅く、港湾深度の浅い（18m）北岸でも対応できた。北岸はまた南に太平山、北の対岸には九龍半島があり、台風避難の点で船舶の停泊に適していた。軍事的な観点（清軍との対抗）を含めて、このような諸条件のために香港政庁（以下、政庁）は香港島の北部を都市発展の中心地に選んだ。北岸にヴィクトリア市をつくり、ヴィクトリア・ハーバーとして中心地になっていくのである。しかし、政庁が常に強調したように、水深が深く、港が広がったわけではない。

(3) 台風との格闘

それでも台風は脅威だった。とくに1874年9月の被害は凄まじく、政庁は防波堤の再建と再建工事を利用した埋め立ての必要性を痛感した。そこで1875年に海辺での大道再建と大規模埋め立て工事を検討したが、財源問題に直面した。イギリス本国からの借入れが実現しなかったため、西環から中環の香港政庁専用ドッグまでの埋め立て工事を完了したのは、ようやく1889年のことである。

台風対策として「避風塘」（船を退避させる港）建設も急務だった。政庁は1874年の台風で被災した漁民のために銅鑼湾で建設に着手し、1883年に完成させた。しかし、狭かったためさらなる拡張を計画したが、資金不足で実現には至らなかった。1906年9月、香港はまたもや猛烈な台風に襲われた。破壊された船3653隻、死者15,000人（大半は漁民）を超えた。政庁は1908年3月、避風塘を拡張した。

望角嘴避風塘の建設では、土地の嵩上げと上下水道の敷設が必要だった。海辺の地主たちは埋めたてに反対で、海辺の有利な位置を失うことで生じる地価下落の賠償を政庁に求めた。政庁は賠償費を支払って、5年を要して1915年に完成した。

しかし、1937年9月に巨大な台風に襲われた。このときも避風塘は十分ではなく、政庁は1962年に新

しい避風塘を建築した。1970年代になると、政庁は自発的に漁船を放棄して陸に上がった漁民に優先的に住宅を配置し、漁民人口は大幅に減少した。

(4) 海港の浚渫

アジア太平洋地域の貿易中継地として、ヴィクトリア・ハーバーを優良港湾にするには、航路浚渫と港口設備の修復整備が必須であった。それが認識されるようになったのは20世紀初めである。遠洋汽船のトン数や喫水の深さが大きくなり、停泊船舶の数が増加したからである。浚渫は、ヴィクトリア・ハーバーの水深が深くて広いという評判を維持するためにも欠かすことのできない事業であった。

浚渫地点は当時の海港重点開発区域を中心としている。このほかに土砂が常に堆積する地域や水路出口・用水路・ゴミ集積所などで浚渫が行われた。浚渫された土砂の処理については環境保全を基本とする考え方はなく、化学検査や分類をしないまま利用された。堆積区はいっぱいになると埋め立て地となった。

(5) 埋め立て

絶え間なく増加する人口を収容し、アジア太平洋地域の中継貿易の中心として成長するには、新しい建築技術を利用して、住居、飲料水、交通などの問題を解決しなければならなかった。都市の中心地域は埋め立てによって土地を増やす術がなく、人工的に作られてきたのである。

しかし、埋め立て計画は様々な困難に直面した。たとえば、セントラル海辺地域では、地主とイギリス軍が埋め立てを妨げたために、1850年から1860年代にかけて埋め立てで土地を拡張できず、西に向かって拡張することを余儀なくされた。これ以降、西環も中心都市となったが、19世紀末までに状況が変わり、埋め立てができるようになった。

埋め立てには資金調達の問題があった。政庁は埋め立て予定地域を競売にかけて、個人地主の出資によって埋め立てと埠頭建設事業を進め、土地を増やし、地主から地税を徴収した。財政支出を節約し収入を増やしたのである。「移山填海」（山を移し、海を埋める）を基本として防波堤を建てる建築法は、埋め立て地造成のモデルとなった。1889～1903年に、政庁は西環から中環の埠頭まで埋め立てを進め、1921～1931年には、中環から湾仔までを埋め立てた。ヴィクトリア市は中環と上環から少しずつ西に向かって西環に拡張するとともに、東に向かっては湾仔、銅鑼湾まで埋め立てを進め、市域を西から東へ带状

に拡張していった。埋め立ての場所と面積は政庁の全体的な開発方針に従って決定された。土地販売を通じて国庫収入を増やし、民間の経済力を借りて埋め立て事業を行う方法で、沿海部の土地開拓を進めることができたのである。

1883年から1945年にかけて、政庁の埋め立てによって増加した土地は、約200エーカーである。埋め立て地は政庁に相当な売却益をもたらしたが、ほかにも倉庫関連で毎年安定的な年税をえることができた。それと同時に、埋め立て地は都市発展の基礎となり、衛生条件を整えたビルが次々と建築されて、人口と商業貿易活動が発展していく条件を満たした。重要な商業住宅地では、電車やバスなどの新しい交通手段を導入できるように、道路の拡幅、汚染物質の排出システム、水と電気の設備も次々に建設され始めた。このようにして利用できる土地面積を増やしたことが都市発展の歩みをもたらしたのである。

(6) 埋め立てと香港島内の地域性形成

都市の各区域の発展は埋め立て事業が行われた時期と深く関係している。19世紀後半、セントラルは活発な商業と貿易の地区であり、上環と西環の多くは広東出身華人が集まる地域であった。そのため、上環では広東省の生活風習や文化が色濃く残って、清末期の文化的特質が今もなお強い。1920年代に埋め立てが行われた下環では、東地区で華人と西洋人の生活の雰囲気が合わさって中国と西洋の文化が混雑した特色を伝えている。1920年代の中頃から1930年代までコーズウェイベイと北角沿岸で行われた埋め立ては、東部の貿易活動を促進し、20世紀前半の香港の商工業発展の特徴を映し出した。

(7) 工務科の設立と埋め立て事業の管理

1883年の工務科設立以降、建設事業は大規模化した。海辺埋め立て部は工務科の重要部門の1つになり、土地と港湾開拓において大きな役割を担った。埋め立て事業は「移山填海」に基づいて進められ、土地面積を増やす必要のある区域に近いところに埋め立て用資材を探し求めた。たとえば、西環の埋め立てには医院山を、湾仔の場合はモリスン山を活用した。埋め立て技術については、1860年代から堆石法で防波堤を建造し、それによって埋め立て範囲を確定し、海辺のフェンスを固める方法で、19世紀末から20世紀はじめの埋め立て事業技術を主導した。

多くの埋め立て事業が民間の資金と力を利用して行われたが、海辺埋め立て部の承認が必要だった。この部署は1924年に「海港開発部」に改称され、香

港全土の海港事業の実現可能性を研究し、建設完成予想図と予算を立案して、工事の進捗状況と質を監督した。こうして多くの個人が請け負った埋め立て事業のほとんどが都市開発全体と歩調を揃え、一定の技術レベルに達することができたのである。

(8) むすび

19世紀後半、とりわけ末以降の海港としての開発は、防波堤建設・避風塘建設・航路浚渫・沿岸の埋め立てによって進められた。これらは香港島の自然的制約を克服する試みであり、都市現代化の象徴であった。

4. 稲津秀樹「港湾都市・神戸概論」

(1) 自己言及的視点を介した問いの発見

この講義では、まず、文明化される都市がその景観を俯瞰してまなざす人間の存在を必要とすることを、香港と神戸の夜景の写真より示しつつ、その「まなざされ方」、つまり、観点に関わる議論から始めた。

ここでは『地域学入門』で仲野誠が論じた「自己言及的視点」について紹介した。この視点では、構造的かつ制度的に把握される地域を生きる「わたし」の感覚を抹消せず、むしろ自己言及的な視点として構造や制度、そして諸現実（リアリティ）を捉え直す方向性が強調される。これは言いかえると、「わたし」の内に織り込まれた他者性／地域性の内実を耳を傾けることで、「生きられる地域のリアリティ」に基づいた問いを提出・探究する観点に他ならない³。

このような自己言及的視点を介することで発見される、地域をめぐる「気づき」がある。講義では、担当者である「わたし」自身がこれまで関わってきた阪神・淡路大震災の追悼行事の動画を入口にしながら、1995年1月に発生した災害を、自身の被災経験とともに伝えることにした。

この追悼行事には在日コリアンや在日ベトナム人たちが運営に関わる姿が「当たり前」に見られる。実際、この行事の開かれる区の被災者構成を見た際も、民族的に多様な背景を有する人びとがいたことが数字として確かめられる。また大震災による死者の割合としても、日本国籍保有者より、在日コリアンをはじめとする外国籍の方が高かったという議論もある。このように災害経験と追悼行事から与えられたリアリティが、神戸における多文化間の混淆過程をめぐる問いを導いたことを冒頭に示した。

(2) 港湾都市・神戸の多文化混淆過程（概略）

次に、こうした多文化混淆過程を考えると、神

戸においては都市という以上に、近代的な港湾機能を持つ都市としてつくられてきたことの歴史的・空間的な文脈が大きく影響しているように思われた。

ここでは『神戸市史』をはじめとする都市史系の文献⁴や資料に基づき、翌日のフィールドワーク訪問先に関連した現神戸市中央区を中心とした以下の3点に限定しつつ、港湾都市・神戸の多文化混淆過程を概略的に伝えた。

- 1) 神戸港開港と河川改修の影響について
- 2) 外国人居留地と内地雑居の影響について
- 3) トアロードのコスモポリタンたちについて

以下、順を追って要約を記す。まず、1)の論点についてである。神戸には欧米諸国に港を開く以前から、兵庫の港を介して中国をはじめアジアと結びつくルートがあった。1853年に結ばれた日米修好通商条約により、神戸港は1863年1月の開港が目指されたが、実際の開港は1868年1月となった。その後も1868年2月の神戸事件の発生、1868年4月の神戸と西宮各地での砲台設置といった事態が続き、外国人居留地が設けられる前後は、欧米からの来訪者と旧士族階級のあいだに衝突／対立が生じていた。

開港後は更なる港湾の近代化を目指すために市内を流れる主要河川の付け替え工事が行われた。これらの河川は付け替え以前から幾度も氾濫を起していたのみならず、大量の土砂を湾の底へ流し込むため、近代的な大型船が入港できない状態を回避する必要があったと言われる。よって河川を付け替えることにより、湾の底に蓄積する土砂とともに水害リスクを港湾部とは別のエリアに移すことが目指された。この影響が洪水被害として顕著に現れたのが、よく知られている1938年の阪神大水害であった⁵。また、河川改修を前後して、大型の造船所や大量の積み荷を取引するための運河が整備されることで、軍事的かつ経済的な意味での富国強兵政策を達成する拠点としての港湾都市がつくられる。この過程がやがて日清戦争(1894年)と日露戦争(1904年)に至り、ひいては後の植民地主義へと連なる歴史的・空間的な文脈を提供することになる。

次に、2)の論点についてである。開港に伴い外国人の暮らす居留地の領域が設定されたものの、江戸幕府倒幕から明治政府樹立へと至る動乱の中、居留地造成が遅れたことや各国との条約改正等のため、1868年3月より神戸においても「内地雑居」が推奨されるようになる。このとき、神戸の中心に多かった外国出身者は中国系と欧米系（特にイギリス系）

の人びとだったと言われるが、その事実は現在の元町中華街や北野異人館の景観へと連なる。観光地としてもよく知られるこれらの景観は、このときの施策の流れの中からつくられてきたのである。

だが、居留地と雑居地の形成によって即座に外国出身者とのあいだの融和が生じていたわけではない。むしろ、神戸市立博物館所蔵の「兵庫港遊歩規定図」(1876年)にあるように、当時は「外国人が開港場の十里(約40km)四方とされた遊歩区域の外へ出るときは、日本の許可(内地旅行免状・パスポート)」が必要であった⁶。さらには、『神戸又新日報』の「内地雑居の暁」と題された、いわゆるポンチ絵の連載記事のように、キリスト教会から聞こえる祈りに耳を塞ぎながら悶絶している和服姿の男性をはじめ、「大和魂」を嘔吐する男性、晩酌時に子ども(男の子)から外国語を教わることになる父親といった表象がこのときの公衆の一反応として残されている⁷。

このように内地雑居に端を発する形で「外国人」の移動上の行政管理とメディア表象上のステレオタイプの境界が引かれる一方で、土地を通じた借地関係としては、次のような「多様」な結びつきがあったと言われる。つまり、「居留地の土地(官有地)が競売による永代借地だったのに対し、雑居地では、外国人はふつう民有地(官有地もあり)を日本人地主との相対によって賃借りした。賃借の期限は永代賃や、永代賃ではないが実質的に無期限に近いものが多く、また、地稅などの借地人の負担も異なるなど、雑居地での借地の状況はじつに多様であった⁸。

講義では、2018年度に訪れた神戸華僑歴史博物館の展示内容も踏まえ、元町中華街の雑居地での形成当時と観光地化された後の景観を比較しながら、もともとは華僑の暮らしと交易の場としてあった街が、観光者向けの街へ変化してきた様を指摘した。また、在神の華僑と日本人実業家らが結びつく中で、1924年に孫文の「大亜細亜主義」をめぐる講演が行われるが、そこで「王道」の東洋文化(精神的な道徳仁義)と「霸道」の西洋文化(物質的な武力鉄砲)との間の「衝突」が主張されたことに言及した。

これはイデオロギーだけのことではない。上述の通り中華街が形成される一方で、開港直後に開かれた「オリエンタルホテル」(1870年～)をはじめ、北野には、1909年に現在の風見鶏の館(旧トーマス住宅)が建築されていく。孫文の解釈はともかくとして、西欧文化を背景とした景観も、居留地と雑居地の両方につくられ始める。この現象はまさに「オリエンタルホテル」という名称が示すように、西欧人からのまなざしを受ける東洋人という構図そのもの

のが、目の前の建築物や街並みに投影されていった動きそのものと言えるだろう。

最後に、3)の論点について述べる。これは西欧人(霸道)対東洋人(王道)という二分法だけでは理解しきれない人と人の交わり方を、ある道の形成から考えたものである。「トアロード」とは、1)の神戸事件の舞台となった三宮神社から、つまりは港湾側の旧居留地から山手側の雑居地だった北野までを結ぶ坂道の名称である。1908年当時、坂を上りきるとそこには英・独・米・仏によって共同出資された「トアホテル」という建物があった。これは1943年に一度閉鎖され、その後営業を再開するも、1950年に完全に焼失した。だが、「トア」という言葉だけは、この道の名称の一部として今も親しまれている。

「トア(TOR)」の由来には、複数の所説があると言われる。まずは、丘陵の頂きに建てられたホテルにちなんで「岩山」を意味する英語説。次に神戸港の世界への開港に伴って、「門」を意味するドイツ語をあてたという説。さらに、東アジアを意味する「東亜」という日本語説。実際、東洋一のホテルを自負していたというホテル側の言明や、戦時中の超国家主義を背景に「東亜」がホテルにも道路にもあてられていたこともあるという。そして最後に、ホテルのマークに鳥居がデザインされていたことから、「TORII」の頭文字を採ったという鳥居説がある。

この道の名づけ方にも表れている多文化間の混淆感覚を裏付けるように、トアロードとトアホテルは少なくない文学者や、移動する人びとを実際に惹きつけてきた。詳細を紹介することは紙面上厳しいが、講義では、この道から南米行き移民船に乗る人たちの群れを描いた石川達三の『蒼茫』(1935年)、有閑階級の女性がショッピングのためにこの道を闊歩する様子を描いた谷崎潤一郎の『細雪』(1943年～1949年)、そして陳舜臣が幼き頃に見たという華僑の娘が嫁ぎ先に送り出される際に祖母が行う儀礼的な振る舞いの様子を描いた『神戸ものがたり』(1998年)、最後に、第2次世界大戦の敗戦前後の時期にこのホテルに滞在しながら、私小説風にその内外の様子を描いた西東三鬼の『神戸・続神戸』(1975年)からの抜粋文を紹介した。特に西東のテキストでは、敗戦前後の混乱期に、白系ロシア人、トルコタター人夫婦、エジプト人、台湾人、朝鮮人たちとの交わりから、トアロードとトアホテルに代表される「神戸」の「コスモポリタン」的な感覚が描写されていて興味深い。

以上の内容を、何先生の講義内容と比較して共通のものとして言えることは、近代的都市生活の中で

東洋文化のみならず、西洋文化との非対称な「出会い」があったこと、異民族間での土地の借地関係が発生したこと等が挙げられる。また近代的な港湾空間の造成にあたっては、水深を深くすると同時に埋め立てていくこと、港に流れ込む土砂を取り除き、河川管理を行っていくこと、台風や水害に悩まされた歴史的な文脈があることといったことが挙げられる。本講義ではこれらに加えて、多文化間の混淆過程が港湾都市の歴史的一空間的な文脈から生まれてきた背景を概略的に示した。

(3) 「港湾都市比較」という今後の課題

最後に、講義では、部分的ではあるものの港湾都市とその比較を通じて東アジア地域を考えるという研究課題を示した。これは近代都市の形成という現象を、一国内の都市化（アーバニズム）の過程としてのみ捉えず、東アジア地域を含めた世界各地との結びつきの中で起きる港湾都市化の動きとして捉え直すことも、将来的に企図したものである。

港湾都市化とその比較という課題が、このプロジェクトの今後を展望するために重要だと考える理由は、上の講義内容に加えて、2018年と2019年に参加した諸大学の位置する場所が、いずれも港湾機能を有する都市であることも、今後の交流の中で活かせるものと考えられる。また、機能論に留まらない港湾都市同士の結びつきに注目することで、「東アジアの近代とは何か」という問いを、国民国家の枠組みに収まらないリージョナルな地域の課題として考える方向性も期待されるだろう。

加えて、港湾都市比較というテーマは、人文・社会科学の思考の枠組みを暗黙裡に基底していた方法的ナショナリズムを超え出る想像力を担保しておくことにも結び付く⁹。それは港湾を越境移動するものたちを思考の基準に置くことで、国内文脈での都市の歴史、空間、文化の捉え方を再解釈するための時空間、いわば、オフショアアの領域から「都市的なるもの」を捉えなおす議論を拓くことにもつながるだろう¹⁰。

こうした越境移動から地域を捉え直す見方をとることで¹¹、グローバル化を背景に主張されてきた国民国家を超える思想の諸潮流（多文化主義、トランスナショナリズム、コスモポリタニズム…）の理論的再検討も可能となる¹²。他方、これはかつて真木悠介の比較社会論が展望した「近代世界の自己相対化-自己超出の運動の一環」を持続させること¹³、言い換えれば、帝国日本にとっての植民地主義（超国家主義）との対峙と超克をめぐる現場としても捉え

られるに違いない。

しかし、理論的な検討の前に注意しておかねばならないのは、グローバル化の諸影響が、即座にナショナリズムの消滅に直結するわけではないことだ¹⁴。むしろ両者は互いに強化し合う関係にある。越境と愛国の論理がせめぎ合う矛盾のただ中から、「私たち」という社会的な集団理解はつくられてきた。上の概略にも記したように、港湾都市の比較から得られる感覚もまさに、「私たちとは何者なのか」という問いである。そこは国境を越えて交わる歴史と空間、そして文化の動態と同時に、想像上の境界が人びとを分断していく現場でもあった。このパラドックスに迫ることが肝要だが、そのためには自己言及的視点以外の観点からのアプローチも求められるのは言うまでもない。地域を捉える上で、個別の専門性を超えた複数者へ開かれた学知を構築する必要性は、東アジア＝トア（TOR）を対象とする本プログラムだからこそ、まさに求められる構えと言えるだろう。

5. アレクサンダー・ギンナン

Asia and the Pacific

プログラムの5回目の講義では、「東アジアと海」のテーマを「アジア」と「太平洋」という観点から捉え直し、カナダの事例や本学での教育活動の紹介を通してこの2つのキーワードについて検討した。複数の国や地域の学生が参加していたため、共通言語の問題があった。これまでの4つの講義では中国語と日本語の通訳を設けていたが、本講義は英語で行うことにした。

周知のとおり、「アジア」という名称はヨーロッパに由来する。ヨーロッパと区別した地域を指すために創り出された言葉である。現在、アジアは一般的に世界の大州のひとつとして認識されているが、ひとつの大陸ではない。むしろ、アジアと呼ばれる地理的範囲に、どこからどこまでが含まれるのかは曖昧である。2つ目のキーワード「太平洋」は、世界最大の海洋として知られている。太平洋を中心とした地図を見ると、左側の周辺にはロシア、日本、朝鮮半島、中国、台湾、フィリピン、インドネシアなどの国や地域があり、これが普段アジアとして受け入れられている。赤道の南には、パプアニューギニア、オーストラリア、ニュージーランド、またメラネシア、ミクロネシア、ポリネシアなどの島々がある。一方、海の右側の周辺にはカナダ、アメリカ、メキシコ、グアテマラ、エルサルバドル、ニカラグア、コスタリカ、コロンビア、エクアドル、ペルー、チリなどがあり、これはアジアではなく、北米と中

南米という。

しかし、このような理解を揺さぶる実態がある。例えば、2014年3月29日にカナダ・バンクーバー市の新聞 *Vancouver Times* に“The Most Asian City Outside Asia”と題した記事が掲載された。この記事が出版された当時、「アジア人」はバンクーバー市の人口の43%を占めていた。太平洋に面するブリティッシュ・コロンビア州のバンクーバー市は、カナダにおける3番目に大きい都市であり、19世紀末から太平洋を通じてアジアの地域と人々と多様な関係を結んできたのである。

講義では、最初に中国からカナダに移住した初代移民とブリティッシュ・コロンビア州の山岳地帯で行われたカナダ太平洋鉄道の建設工事の歴史を概観した。1881年から1885年の間に約15,000人の中国人が鉄道の工事を担うためにカナダへ渡ったが、過酷な労働により、大量の死者が発生した。鉄道が完成した後、カナダに残った中国人の多くはバンクーバー市東部の製材工場で働くようになり、この時期にバンクーバーに中華街が形成された。

次に日本からカナダへの移住について取り上げた。日本からカナダへの移住が本格的に始まったのは、1887年にバンクーバー港の建設が完了し、横浜との間で定期航路が開いてからである。この時代に日本の農村における米価の低落、地租の重税、凶作などによる不況が海外移住の要因となった。カナダに渡った移民は、漁業、炭鉱、山林伐木業などの仕事に従事し、20世紀に入ってもほとんどはブリティッシュ・コロンビア州に集住していた。このような背景の中、バンクーバー市の東部に日本人街も形成されるようになった。カナダに住む日系住民の生活と日本人街の存在は、第二次世界大戦中に急変した。

1941年12月7日(太平洋標準時)の日本軍による真珠湾攻撃の後、カナダ政府は対日宣戦を布告し、1942年3月16日になると日本国籍の移民、帰化人、カナダ生まれの日系人全員(約21,000人)が太平洋岸から約100マイル東の収容所や労働現場へと強制的に移動させられた。戦争が終わると、カナダで住み続けたい人は、州外に拡散するように命じられ、そうしなかった場合は日本へ送還された。1949年にブリティッシュ・コロンビア州に帰還することが許されるようになったが、戦前の居住地に戻る人は少なかった。

一方、中国人に対してカナダ政府は、1923年に特定の資格所有者以外の入国を完全に禁じる移民法(中国人排斥法)を導入した。これによって、一般

の中国人は1960年代までカナダから締め出され、男性労働者が大半を占める中国人人口は徐々に高齢化し、減ることになった。

ようやく、1960年代に移民法が改正され、白人系の欧米人を優先する移民政策から教育や言語能力によるポイント制の受け入れ制度に移行した。そして、1971年に政府はフランス語と英語の両方を公用語と認める二言語政策と並んで多文化主義の政策を導入し、1988年には多文化主義法を議会で通過させた。この間、1961年から1971年にかけてバンクーバー市に在住する中国系住民は15,223人から30,640人に急増した。また、1960年代以降にカナダに移住した中国系移民の多くは英語が堪能な香港出身者で、低賃金労働ではなく、高収入の専門職に就いた。80年代には香港から大勢の移民が流入したが、膨大な資金もバンクーバーに投資された。さらに、文化大革命の終焉によって、80年代後半から中国の資本と人材もバンクーバーに投資されるようになった。そして、1997年に香港の返還により、香港からカナダへの富裕層の移住が一気に増加した。現在、一般の中国系住民は固まって中華街で暮らすわけではなく、バンクーバー市内各地で生活する。

このような太平洋を跨いだアジアとバンクーバーの連関と鳥取県の関係について考えることもできる。1895年から第二次世界大戦によって移民が禁止されるまでの間に、鳥取県の境港市と米子市が位置する弓ヶ浜地方から1,500人以上の人々が北米の西海岸へ移住した。「東アジアプログラム」の講義では、バンクーバー市に拠点を置くアーティスト、シンディ望月(1976~)の作品《石/紙/鉄》(2017)を取り上げた。望月は2014年の夏にアーティスト・イン・レジデンス事業の招聘作家として鳥取県米子市に滞在し、19世紀末に鳥取県からブリティッシュ・コロンビア州に渡り林業に従事した移民の歴史と、米子の湖に浮かぶ小島にかつてあった料亭を題材に《紙》と題した歴史改編SFラジオドラマ作品を制作した。その後、この作品を発展させるために望月は、ブリティッシュ・コロンビア州と鳥取県を行き来しながら3年間にわたって関連の歴史と地域の調査を続けた。その結果、2017年に木材のテーマに加えて石炭と鉄といった自然資源とカナダに移住した日本人移民の歴史を題材に、1900年代から2100年代にかけて鳥取県とブリティッシュ・コロンビア州の間をタイムスリップする、ラジオドラマ、ビデオ/アニメーション、造型を組み合わせたインスタレーション三部作《石/紙/鉄》を制作した。移住、移動、越境な

どの観点から「アジア」と「太平洋」の意味を想像し直すための作品である。

最後に、現在「地域調査プロジェクト」という2年生の授業で行っている教育活動の紹介を通して、アジアと太平洋の関係について考察を重ねた。鳥取県出身の外交官、澤田廉三と結婚した澤田美喜(1901~1980)は、1937年に廉三の地元岩美町に「鷗鳴荘」という別荘を建てた。1950年代から80年代にかけて、多様な人種的ルーツを持つ子供たちが夏をこの別荘で過ごした。「地域調査プロジェクト」では、その歴史的経緯について調査している。

周知のとおり、第二次世界大戦の後、日本は7年間(1945-1952)連合国によって占領されていた。その期間に、占領軍と日本の人々の間で様々な人間関係が展開し、占領兵と日本の女性の間で子供が生まれるケースも多かった。残念ながら、両親に遺棄される子供も少なくなかったため、占領期にはいわゆる「混血児問題」が発生した。澤田美喜は、この問題に対応した重要人物の一人である。1946年に神奈川県大磯町に児童養護施設エリザベス・サンダース・ホームを設立し、多くの「混血児」と呼ばれた子供を受け入れた。そして、1950年代から岩美町の別荘を臨海学校として活用し、ホームの子供たちが夏を鳥取県で過ごすようになった。

占領期に生まれたいわゆる「混血孤児」は、日本人の母親と外国人兵士の父親の両方に遺棄されたため、どの国に帰属すべきなのかについて議論は分かれた。ホームの子供たちの多くは養子として海外で暮らすようになったが、日本で育って生活している人も少なくない。

バンクーバー市、シンディ望月の《石/紙/鉄》、澤田美喜とエリザベス・サンダース・ホームの子供たちは、いずれも「アジア」と「太平洋」と切っても切れない関係を持つ。同時に「アジア」という一見当たり前前の概念を攪乱させる事例である。講義の後、4つの異なる大学/地域からの参加者に、講義の内容を踏まえて自分なりに「アジア」と「アジア人」を定義するように求めた。地理に重点を置く回答、人種あるいは文化を重視する見解など、結果はバラバラであった。「アジア」や「アジア人」は決して当たり前ではない。この点を確認することが本講義の狙いであった。

6. 「地域学」としての成果

上記の東アジアプログラムでどのような講義・講演を組むかは、プログラムのテーマとの関係で決めている。日程については、鳥取と神戸での現地調査

を効果的なものにするために、直接関係する講義2つを調査前日に組み込んでいる。したがって、プログラムで参加学生に提供できたことについては現地調査を含めて考えるべきであるが、調査の重要な点は講義のなかですでに語られているので、以下では講義・講演の内容のみから考えたい。ここでの問いは、地域学の観点から見たとき、私たちは何を提供できたのか、あるいは何を引き出し、地域学に吸収できるのか、である。

最初に、講義で筆者(柳原)が目にした点を手短かに整理する。『源氏物語』の世界では、日本の古典文学を代表する、世界に知られた『源氏物語』が、中国を中心とする漢文世界のなかで『史記』という歴史叙述を踏まえていること、言い換えると、文化は他の文化との影響関係と混淆のなかでつくられてきたということである。

「近世日本の政治と文化—三都と鳥取—」では、以下の指摘が興味を引いた。近世日本の政治構造は江戸の徳川将軍と各地の藩主との関係を基盤にしていること、とはいえ、江戸一極集中ではなく、大坂(経済)と京都(宗教・諸芸)を含めた「三都」での役割分担があったこと、藩レベルでは、大名の城下町を中心に徳川将軍との関係を可視化しつつ秩序を形成していったこと、である。「鎖国」のなかでまなざしは常に中心に向けられていたように見える。ところが、地方の小大名であった亀井茲矩は、海を介して中国や世界を見ていた。近世初期には多様な交流の在り方が存在し、まなざしは世界にも向けられていた。

「香港の海港と土地開発 1840~1930年代」でまず注目したのは、香港が都市として、さらにはアジア太平洋地域の貿易中継地として発展するには、自然の制約を人間の力で克服する必要があったことである。面白いのは、香港政庁が香港を自然の良港であるかのように装ったことである。アジア太平洋地域の貿易中継地となるには、そう思わせることが必要だった。

自然を克服するには、人間がつくり出す様々な利害や課題を知恵を絞って調整しながら乗り越えなければならなかった。講演のねらいは、環境問題を示唆しつつも、20世紀半ば以降の香港発展の基礎を築いた、このような奮闘ぶりを高く評価することだった。

筆者にとってもうひとつ興味深かったのは、異なる時期に行われた埋め立てと開発が香港島のなかに独特の文化や景観をもつ小さな地域を生み出し、それが存続していることである。広東省の生活や文化

を色濃く残しているところもあれば、中国と西洋の文化が混淆しているところもある。都市の景観のなかに過去が刻み込まれ、景観が人々の感覚を育ててきたのである。

「港湾都市・神戸概論」は、「わたしの、いま、ここ」から考えるという自己言及的視点の紹介から始めて、神戸で多文化が混淆していくプロセスとその意味を検討した。

ここでも最初に語られたのは、自然の人為的な改変とそれによって開かれた、負の側面を含む、港湾都市としての可能性である。次が、居留地がつくられ、内地雑居が進むなかで空間に刻まれていく、様々な施策や生活の歴史と多様なまなざしであり、それが特徴づけていることである。たとえば、トアロードでは、様々な文化が混淆してコスモポリタンの雰囲気生まれ、人をひきつけ、その感覚を強めてきた。過去の記憶が積み重なって景観をつくっているのである。最後に、越境移動する人々を思考の基準において地域を捉え直すことで拓かれる理論的な可能性と新たな問いである。

Asia and the Pacific は、「東アジアと海」というテーマが無意識にもっていた限界をあらわにし、視界は太平洋の向こうにまで一気に広がった。そこでみてきたのは、カナダの港湾都市であるバンクーバーと中国・日本・鳥取との間の、19世紀末以来の人の移動・移住・越境が生み出した複雑な関係性である。戦後の「混血孤児」と澤田美喜との関係をめぐる問いもまた、鳥取県岩美町に残る1つの建物から大きな世界へと学生たちの視野を広げた。

この講義は、「中国」「日本」「鳥取」「カナダ」「アジア」「太平洋」という、私たちにとって前提となっている思考の枠組みを揺さぶり、それらを再検討するまなざしと想像力を求めている。

このように整理してみると、「東アジアと海」というテーマで行われた講義と講演は私たちのまなざしのありようを問うている。いつの間にか身についた捉え方や思考の枠組みを見つめ直すよう促している。私たちの今の生活を支えているもの、制約しているものは何なのか、どのような生の積み重なりの上に、関係性のなかに、今があるのかを、自然との関係を含めて、様々な視点から、丁寧に考えることである。

東アジアプロジェクトの素晴らしいところは、4つのプログラムに参加することで、学生も教職員も、このようなことを新しい仲間たちとともに、知的かつ感覚的に、楽しく、真剣に、少しずつ自然にできるようになることではないだろうか。(柳原邦光)

IV. 東アジアプロジェクトの全体像

東アジアプロジェクト(正式には「東アジアで語学力と現地感覚をもって活躍できる人材を育成するプロジェクト」)の目的等のあらましについては、本稿の冒頭で紹介した通りである。ここでは補足的に説明を加えた後、東アジアプログラム以外の3つのプログラムの概略を紹介する。

人材育成については、以下の目標を掲げている。日本の経済・社会・文化・政治のありようだけでなく、様々な国や地域の歴史と現状、それらが織りなす関係性(多様性、重層性、多元性)をよく理解して、発想し実践することのできる人材を育成する。学生たちは様々な企画への参加経験を通して、相互理解と交渉に必要な語学力と学術的な知識と現地感覚を身につける。また、語学・歴史・文化研修(プログラム)や講演会等への参加、研修等のサポートで、中国語と韓国語の語学力向上を図る、ということである。そのために、学生たちには中国語能力検定試験(HSK)・韓国語能力検定試験(TOPIK)の受験と留学を勧めている。ここ2、3年は同時に英語を学ぶ学生も現れて、多言語を学ぶようになりつつある。

プロジェクトを動かしているコアメンバーは、地域学部国際地域文化コース(地域文化学科)の筆者(柳静我、中国史)と、柳原邦光教授(フランス史)、岸本覚教授(日本史)の3人である。筆者はプロジェクトの推進者として、海外の諸大学との協議、プランの作成と実施、言語教育を含む学生指導を担っている。関係大学には、筆者と専門分野を同じくし、日本語も堪能な教員がいるため(つまり、中国語と日本語が共通言語)、コミュニケーションに問題はなく、意思決定がとても速い。

東アジアプログラムには歴史学だけでなく地域学も研究している柳原教授の担当で、設定されたテーマに相応しい研究をしている教員等に講義を依頼している。岸本教授は鳥取で地域調査を実施し、それに関連する講義も行っており、歴史を体感する機会と知識を提供している。

東アジアプロジェクトを推進するには資金も必要である。これについては、2015~2016年度は「国際化拠点整備事業費補助金(グローバル人材育成推進事業)」、2017年度からは「鳥取大学グローバル人材育成支援プロジェクト」から予算をいただいている。学生の費用については、地域学部同窓会尚徳会(尚徳奨学金)と鳥取大学地域学部助成会からご支援を得ている。それぞれの大学においても大学・学部のバックアップがある。こうした多方面からの支援な

しには、教員と学生がいかに熱意をもっていてもプロジェクトを進めることはできない。とても感謝している。

次に東アジアプログラム以外の3プログラムについて概略を紹介する（詳しくは、地域学部の『海外派遣プログラム報告書』参照）。東アジアプロジェクトの重要な特徴の1つは、東アジアプログラムに関わった地域学部生の多くがほかの3つのプログラムにも参加していることである。また、海外でのプログラムでは、東アジアプログラムにやってきた学生たちが、サポートする側に回っている。互いに支え支えられる関係が生まれているのである。以下は3つのプログラムの概要である。

〈中国プログラム〉

中国福建省廈門市にある廈門大学で毎年3月に実施している。約2週間のプログラムで、廈門大学人文学院の全面的な協力の下、中国語の授業、廈門大学人文学院教員による授業のほか、現地調査を人文学院の学生たちと一緒にやっている。2017年からは台湾高雄師範大学の学生と教員も加わって、共同で授業と現地調査を行い、3地域の学生たちが協力しあう体制になった。中国プログラムはこのような形で中国の歴史・文化・言語を学び、現地感覚を養っている。

〈台湾プログラム〉

2014年～2017年度までの4年間、「地域調査実習」（地域学部2年生必修科目）で「東アジアグループ」として台湾の各地で調査実習を実施した。参加者がとても多かったが、2017年度をもって活動を終了した。現在は「海外フィールド演習：台湾」（選択科目）となっている。2019年度は2020年1月4日～8日に呉令青副教授（国立高雄師範大学台湾言語文化研究所）のサポートを得て実施した。参加学生は12名である。なお、2019年夏の東アジアプログラムに参加した高雄師範大学の学生たちが調査期間中ずっと同行しサポートしてくれた。

この調査では次の目標を掲げている。中国を中心とする東アジアの歴史・文化に関する授業内容（「東アジア地域史」）を現地調査で確認して、参加学生たちが自分と直接関わる場として「東アジア」を体感すること。特に、1つの地域を超えてつながる「文化」、1つの地域で重層的に存在する「文化」というテーマ設定を通じて、文化の動的なあり方を把握することである。

〈韓国プログラム〉

毎年、東アジアプログラム終了後に韓国の歴史と文化に関する現地調査を行っている。たとえば、2018年度には、梨花女子大学校人文科学部史学科の鄭恵仲教授（同年夏の東アジアプログラムで招聘講演）のご協力を得て、梨花女子大学校を拠点に5泊6日を実施した。調査テーマは「朝鮮の開港」と「植民地・戦争の記憶」である。このときに学生だけで行う「グループ調査」（1日間）を初めて実施した。地域学部の学生たちが調査したいテーマを決めて、韓国語の堪能な日本人学生とともに梨花女子大学校史学科学生の協力を得て調査したのである。このようにどのプログラムでも、少しずつ新しい試みをしている。（柳静我）

V. 東アジアプロジェクトから学んだこと

1. 小村幸基（地域文化学科4年）

「東アジア」と歩んだ4年間

私は「東アジアプロジェクト」に巡り合うことができたおかげで素晴らしい4年間の学生生活を送ることができた。もちろん、楽しいことばかりではなく辛いこともたくさんあったが、それも含めて成長する糧になった。ここでは私がプロジェクトに参加してから現在に至るまでどのような経験をしてきたのか、その経験が私をどのように変えたかについて述べることにする。

プロジェクトに本格的に参加するきっかけになったのは、大学2年生前期の韓国プログラムへの参加である。たまたま柳 静我先生を研究室に訪ねたとき、「韓国プログラムに参加しない？」と誘っていただいた。そのとき海外渡航経験はなかったが、もともと一度は海外に行きたいと思っていて、K-popにも興味があったので、参加することにした。最初は参加学生の中で男子学生は私だけ、しかも現地の協力校は梨花女子大学校ということで不安が大きかった。しかし、参加学生や現地の学生と一緒に行動して、日本とは違った歴史・文化・言語を学びつつ現地の人と交流することに新鮮な面白さを感じた。異文化を座学だけでなく現地で直接体験しながら学ぶことが「こんなにも楽しいものなのか」と感動を覚えたのである。韓国プログラムで感じた面白さと感動は、帰国後のゼミ選択で「東アジア」をフィールドとする東アジア歴史文化ゼミを迷わず選択させることになった。

その後、3年次前期に中国廈門大学でのプログラムや鳥取大学での東アジアプログラムに参加して、

国という枠を超えた歴史や文化、人との繋がりにさらに惹かれていった。その一方で、他国の歴史や文化を少しずつ理解し始めたものの、外国人たちと意見交換できないことにもどかしさを覚えた。それで中国語と韓国語を実践的に学ぶことにした。特に第2外国語の中国語に力を入れて取り組み、3年次後期には厦門大学に留学した。

留学先では言語だけでなく、華僑・華人を通じた中国と東南アジアの歴史や文化、人とのつながりを肌で感じ、私の視野と関心はさらに広がった。用意されたプログラムと違ったのは、自ら行動して人と会う機会を探さなければならなかったことである。留学を終えるとすぐに就職活動が始まることもあって、海外で働く日本人の様子を見ておこうと、現地の日系企業(運送関係)や厦門市と姉妹都市関係にある長崎県佐世保市の市役所職員の現地視察にインターンシップ生として参加させていただいた。中国留学は半年間という短い期間であったが、中国語の力をつけることができたし、たくさんの人との出会いにも恵まれた。そして、自分自身が積極的に行動するようになった。フットワークがずいぶん軽くなったのである。それもまた私にとって大きな成果である。

帰国して就職活動が始まった。私は東アジアプロジェクトへの参加や中国留学を通して「海外の人と触れ合う仕事がしたい」「言語を活かせる仕事がしたい」という思いが強くなっていたので、旅行・航空・鉄道関係の会社を志望した。エントリーシートや面接では東アジアプロジェクトに参加した経験が大いに役立ち、自己PRや大学で頑張ってきたことなどを正々堂々と述べることができた。結果は大いに満足と言ったらうそになるが、旅行会社とご縁があり、2020年4月から働くことになった。

就職活動に励んでいる頃、それと並行して国際地域文化コースの「大学入門ゼミ」や地域学部必修科目の「地域学入門」で東アジアプロジェクトや留学の成果を発表した。実は就職活動が思うように進まない焦りもあって、「どのように発表するのか」まったくアイデアが出てこなくて、発表準備は危機的状況にあった。それでも柳先生や研究室の仲間と協力して試行錯誤を重ねて、本番では納得のいく発表ができた。

就職活動や成果発表が一段落すると、次は東アジアプログラムと韓国プログラムだった。いずれも学生生活最後の参加となるので、プログラムをまとめる側に回った。東アジアプログラムには新たに香港中文大学が加わったので、責任重大であった。先生

や学生たちとプログラムのスケジュールの立案から始まって、すべての参加学生がプログラムを楽しめる雰囲気づくり、言葉の問題など大変なことばかりだったが、参加学生と助け合いながらプログラムを進めた。10日間のプログラムだったが、かつてない貴重な経験をすることができた。

韓国プログラムは卒業論文のテーマにつながる重要な機会となった。事前学習で朝鮮キリスト教史を学んだことや朝鮮王朝時代のキリスト教弾圧の舞台となったソウル市内の切頭山、そして、朝鮮開国以降、近代教育と医療の普及に従事したプロテスタント宣教師の埋葬地である楊花津墓地を調査したことで関心が深まった。それで「東アジア(日本・中国・朝鮮)におけるキリスト教の伝来と対応」というテーマで卒業研究を進めることにした。様々な文献を読み、まとめていくことは決して簡単なことではなかったが、先生の指導を受けながら研究を深めるなかで新たな発見がいくつもあった。実に楽しい経験だった。

東アジアプロジェクトという学びの場があったおかげで、充実した、悔いのない4年間を過ごすことができた。新しい地域との出会いにワクワクし、そのフィールドで活躍できるよう挑戦し続けたいと思うようになった。このことを喜びたい。そして、今後は旅行会社の社員として東アジアのみならず新たなフィールドにも足を踏み入れたい。素晴らしい出会いを楽しみにしている。

2. 垣屋知里(地域文化学科4年)

「地域」から学ぶ多様性とのつながり

私はこれまで、鳥取大学での「東アジアプログラム」に2回、「中国プログラム」に1回、「韓国プログラム」に4回(うち1回は同プログラムの前身である「韓国語学研修」)、「台湾地域調査実習」に2回参加した。そして、3年生後期にはマレーシアのマラヤ大学に留学した。

私が「東アジアプロジェクト」に参加するきっかけとなったのは、「韓国語学研修」への参加である。私はもともと韓国のアイドルが好きで、韓国語に興味があったため、大学では第2外国語として韓国語を学んでいた。また、大学入学前から韓国に行きたいと思っていたので、1年生の夏休みに「韓国語学研修」に参加したのである。これが私の初めての海外経験となった。当時は韓国語が上手く話せなかったが、初めて海外の学生と交流することが刺激的で楽しかった。自分の知らない外国の文化を知ることにも勉強になった。それと同時に、プログラムに

同行されていた先輩方が韓国語で現地学生と活き活きと会話していらっしやる姿を見て、大変うらやましかった。これを機に、もっと外国の文化を知りたい、もっと外国語を勉強して海外の学生と交流したいと思うようになった。そういうときに柳静我先生に誘っていただいて「東アジアプロジェクト」に参加することになった。

海外で現地調査を行うプログラムでは、現地へ行く前に、文献で現地の歴史や文化を学んだり、先生や留学生と一緒に現地の言語を学んだりする。この過程を経て現地へ行くと、事前に勉強していたことを自分の目で確認したり、感じたりできる。新たな発見をすることもある。言語面に関しては、自分が学んできた外国語を使いながら会話することができる。自分の外国語が現地の人に通じたときは、何事にも代えがたいくらい嬉しい。通じないこともあるが、それは以後の外国語学習へのモチベーションに繋がる。こうして、歴史や文化の知識を蓄えつつ、外国語力の向上を図ることができた。

私たちは、各調査で様々なテーマを設けて、多角的に歴史や文化を学んできた。中でも印象的だったのは、国境を越えて広がる中華文化である。例えば、中国南部発祥の民間信仰である媽祖が代表的な例である。媽祖は「航海の神」として知られ、中国南部の人々が海を渡って他の地域へ渡航する際、媽祖像と行をともした。中国南部や台湾での調査で多くの媽祖廟を目にし、媽祖が今日でも広く信仰されていることを実感した。

プログラムを通して、世界に広がる中華文化についてももっと詳しく知りたいと思い、中華系の人々(以下、華人)が国民の約4分の1を占めるマレーシアのマラヤ大学に留学することにした。大学では、**Chinese Culture and Society in Southeast Asia** という講義を受講し、東南アジア華人のルーツや商業ネットワーク、宗教やアイデンティティなど、彼らの歴史と実態を学ぶことができた。言語面でも収穫があった。講義中や現地学生・世界各地から来た留学生と会話するときは英語を使った。また、私のルームメイトは韓国人留学生だったので毎日韓国語を使って会話していた。ほかにも現地の華人学生から週に1回中国語を教わった。マレーシア留学では、こうして自分の目的に焦点を当てて3つの外国語を使いながら学ぶことができた。

マレーシアから帰国後まもなく就職活動を始めた。私は文献や現地調査で各地域の歴史や文化について学んだことや世界各地の人々と交流してきた経験を活かせるような航空業界やホテル業界での就職を目

指した。就職活動では、いつ内定がもらえるのだろうと不安になったこともあったが、自分が経験してきたことに自信をもって、大学での学びをアピールした。そのおかげで、第一志望の航空業界の会社から内定をいただくことができた。

就職活動後、小村さんと共にリーダーとして「東アジアプログラム」に参加した。海外の人々をまとめることは初めてだったが、プログラムを通して様々なことを感じた。嬉しかったのは参加者に楽しんでもらえたことである。参加学生みんなで楽しく学び、交流した。そしてプログラムの最後に私と小村さんでプログラム初日からの思い出写真をまとめたスライドショーを上映した。東アジアプログラム初の試みだったが、先生方を含め参加者の皆さんはとても感動しているようだった。その一方で反省点もある。うまく全体を把握することができなかった。例えば、午前の授業が終わって後片付けをしていると、中国人学生1人の姿が見えなくなった。昼食をとり食堂へ向かっていたのだが、リーダーとして目配りしてしっかり連絡事項を伝えるべきだった。

東アジアプログラムが終わり、いよいよ卒業論文を書き始めた。留学中に学んだ東南アジア華人の歴史の変遷を長期的スパンで整理したいと思い、卒業論文のテーマにした。論文は、座学で学んだことだけでなく、実際に現地調査した内容や写真を入れることで、具体性と深みのあるものにできた。

私は「東アジアプロジェクト」や留学を通して、各地の歴史は様々な事情が重なってなされた選択の結果とその集積であることを実感した。また、文化のイメージが変わった。プログラムに参加したばかりのころは、「文化の多様性」と聞くと、孤立した文化がたくさんある状態を想像していたが、今では、文化の一つひとつが他の様々な文化とつながっていて、それが全体として「文化の多様性」を生み出していると実感している。

このほかに、プロジェクトや留学を語る上で欠かせないのが、国境を越えてつながっている友人たちである。友人たちとは今でも連絡を取り合って、自分の知らない現地の情報を聞いたり、彼らの勉強に対する姿勢に刺激を受けたりしている。もちろん、それは外国語能力の向上につながっている。友人たちとのネットワークは大学卒業後もずっと続く、かけがえのない財産である。

さらに、初めてのことに挑戦する気持ちや、各地域の文化や外国語を理解できる強さ、多様性に対する強さをもつことができた。様々なプログラムに参加したので、とても忙しくて疲れることもあったが、

それを乗り越えたことでタフになれたと思う。大学卒業後は、これまで培ってきた経験を活かして、世界各地の人々が利用する国際空港で自分の力を発揮したい。視野をもっと広げていきたい。

最後に、プロジェクトや留学を通してお世話になった先生方、友人、家族などに感謝して、終わりとしたい。

VI. むすび：プロジェクトの成果と展望

1. プロジェクトの成果と今後の課題

これまでを振り返ると、東アジアプロジェクトの起点は2013年度だった。私(柳静我)の「応用ゼミ」(2年生後期)での台湾調査を皮切りに、2014年度に「台湾地域調査実習」(協力：高雄師範大学)・「韓国プログラム」(翰林大学校、2017年度からは梨花女子大学校)・「中国プログラム」(厦門大学)をスタートさせた。鳥取大学での試みとしては、2015年度に厦門大学と「日本語・歴史・文化」プログラムを始めた。これは2016年度に「東アジアプログラム」へと進化した。ほかにも2017年度～2018年度に梨花女子大学校を迎えて特別プログラム(3回)を実施した。

プログラムを続けるなかで、厦門大学・翰林大学校・高雄師範大学と部局間の学術交流協定書及び学生交流の覚書を締結することができた。2018年には梨花女子大学校とMOUを交わした。このほか2019年度に厦門大学との交換留学生枠を3名から6名に改め、高雄師範大学とは大学間協定に発展し、交換留学生枠も3名から5名に増やした。さらに、韓国慶熙大学校文科大学と部局間協定を締結することができた。こうして、この5年間で、厦門大学・高雄師範大学・翰林大学校・慶熙大学校との間で留学生の交換が可能になった。

実際の留学生数は、厦門大学から鳥取大学地域学部に13名、高雄師範大学からは2名、逆に地域学部から厦門大学に5名、協定校の韓国釜慶大学校に2名である。2020年度の場合、現在はっきりしているのは、厦門大学への留学希望者1名、高雄師範大学に2名、慶熙大学校へは3名である。全体として、これらの協定大学とはきわめて良好な関係にある。

交流を通して学んだことは多い。たとえば、今は調査前に事前調査書を作成して現地調査に活用しているが、これは梨花女子大学校の調査方法から学んだことである。学生1人ひとりが毎日調査日誌を作成して1日を振り返り、記録することは厦門大学から、プログラムでの外国語によるプレゼンテーショ

ンは高雄師範大学から学んだ。逆に東アジアプログラムが影響を与えたこともある。たとえば、高雄師範大学は地域学部とともに厦門大学でのプログラムに参加するようになった。また、調査ではどのプログラムでもよく似たテーマを設定するようになった。互いに影響し合っ問題意識を共有するようになったのである。

今後に向けた課題については、学生交流と研究交流の2つに分けて考えたい。学生交流は現在のやり方と内容でほぼ問題ない。2019年度の東アジアプログラムでの協議(8月1日「今後に向けた協議」)で話題になったのは、慶熙大学校の2020年度東アジアプログラムへの参加とプログラムにおける香港中文大学の役割である。同大学から初めて参加された何佩然教授のプログラムの印象はとてもよく、2020年度も参加するとしたうえで、3月の厦門大学での中国プログラムを終えた後に香港中文大学研修を2日間くらい加えることを希望された。素晴らしい提案であるが、東アジアプロジェクトはかなり手を広げているので、全体を視野に入れて慎重に検討する必要がある。もし英語関係教員の協力を得て、東アジアプロジェクトに関わる教員を増員できれば、香港中文大学を英語研修の場とする新たな関係構築につながるかもしれない。

学術交流については、海外や国内から研究者を招聘して、講演会と意見交換会を開いてきた。逆に、地域学部の教員が招聘されたこともある。この形は今後も続けていきたい。ただ、できれば講演内容を『地域学論集』掲載するなどして研究成果を蓄積する形を整えたい。

先の協議の結果、2020年度の東アジアプログラムでは参加大学と学術シンポジウムを開催することになった。学術交流についても一歩踏み込みたいからであるが、設定するテーマについて、何教授から「都市化」はどうかという提案があった。都市における伝統と革新、衝突とその解決を文化の視点を含めて検討したいというのである。このように参加大学が増えるにともなって新たな視点やテーマが加わるのは喜ばしいことである。毎年、テーマを戦略的に設定して研究成果を蓄積することで、歴史学と地域学の両面において成果をえたいと考えている。

2. 学生の変化

次に学生についてである。真っ先にいえることは、地域調査に臨むときの姿勢が変わってきたことである。文献調査をしっかりとやって、それを現地で自分の目で確認しようとする意識がとて強くなった。

そうすることで新たな問題意識が生まれ、その答えを自分たちで見つけようとする。プログラムで中国・韓国・台湾を訪ね調査することで、歴史や文化を比較しつつ、国を超えた何かを感じるようになってきている。言語への関心が高まり、複数言語を学ぼうとする学生が増え、留学を目指すようにもなった。興味深いのは、海外の学生や留学生との関係も変わってきたことである。珍しい外国人の友達というよりも、日常的に互いに学び合う仲間という意識になっている。

こうした点については、4つのプログラムとともに、5年前に始めた「勉強会」も大きな役割を果たしている。勉強会は私が主導して始めた。というのは、学生1人ひとりが独力で何かを見つけ、実現していくのは容易なことではない。教員が手助けして、背中を少し押してやることも必要だと思ったからである。それで、毎週、私の研究室で中国語と韓国語を教え始めた。

それが今では鳥取大学への留学生も参加して、地域学部生とマンツーマンで語学を学び合っている。地域学部生も教わるだけでなく日本語を教えている。また、留学して帰ってきた上級生が教えることもある。語学だけではない。留学経験や留学のための資料の作成方法、さらにはエントリーシートの書き方を含めて就職活動の仕方まで伝えている。

どうやら学生たちは学ぶことが嫌いではなさそうである。競争相手がいて刺激し合える場、楽しく学ぶことのできる場のあることを喜んでいる。それぞれが学びたいことを学び、何かを積極的にしようという姿勢が顕著になった。これからは学生たちだけで勉強会をやっていけそうである。もちろん、研究室では手狭になって、今はコースの演習室を利用している。

この変化は地域学部改組と関係があるかもしれない。改組で「地域文化学科」は「国際地域文化コース」となった。「国際」がただけであるが、学生たち（1年生から3年生）の態度や海外への関心が変わってきた。実際、「海外フィールド演習：台湾」には1年生が5名も参加した。ほかにも2年生以下で留学希望者が6名いる。しかも複数の言語を学びたいという。大きな変化である。

学生たちは、勉強会や東アジアプロジェクトの4つのプログラムへの参加、そして留学で大変多忙である。それでも充実した、引き締まった表情をしている。様々なことを経験し積み重ねて、そこから卒論のテーマが浮かんでくるようだ。将来自分のしたいことを見つけるきっかけにもなっている。

就職については、どこに就職できるかは学生たちにとって切実な関心事である。小村幸基さんと垣屋知里さんの報告からもうかがえるように、学生たちは話したいことがたくさんあるので、自信をもって就職活動を行う。面接も怖くない。そのせいか、4年生はほぼ希望を実現できている。

後輩の学生たちはといえば、上級生を見て、それぞれの段階で何をすればいいのか、どうすればいいのかが具体的にわかって、自分もチャレンジしようという強い気持ちをもつようになっている。これは実にいい関係である。

プログラムを立ち上げたときのことを思うとまさに隔世の感がある。開始して7年の間に学生たちの雰囲気はずいぶん変わってきた。予想を超えた変化に私は喜びを感じている。

3. 展望

プロジェクトをやってきて、問題意識をもって自ら学んでいく力をもった学生が出てきたことに大きな希望を感じる。歴史学だけではない、地域学的な知識と感覚もあわせもった人材が育ちつつあるという手応えがある。実際、学生たちは新しいもの、文化の違いを楽しそうに受けとめている。新しい環境に出会ったときの適応も速くなった。自分で考え、自分で動いて、言語と歴史感覚を身につけていく学生たち。一国家ではなく、東アジアを地域として捉えようとする感覚をもち始めた学生たち。学生たちの将来が楽しみである。プロジェクトをやってきて本当によかった。

4. 私自身の変化

私自身のことも少し書いておきたい。何も考えずにプログラムを始めたが、積み重ねが重要だとつくづく感じている。関係教員たちのつながりはずいぶん深くなった。それが刺激になって、プログラムに反映されている。さらにいえば、ともに何か尊いものを心に刻んでいる。専門の研究についても、学生と一緒に台湾史・日本史・韓国史を学んでいるうちに、専門分野での私の問題意識が広がり深くなってきた。成長するのは学生たちだけではない。教員も私自身も成長している。

日本で中国史を研究し教えている韓国人の私にとって、国境を越えたつながり／ネットワークはとても心地がいい。国民国家の人為性や枠組みに収まらないものを肌で感じて、「地域は人を自由にする」という感覚が少しずつ強くなっている。（柳静我）

注

1. 東アジアプロジェクトの基本構想は2016年度「キャンパスアジア」申請でほぼできあがっていた。鳥取大学は、地域学部を中心にして、厦門大学（人文学院）と翰林大学校（社会科学大学政治行政学科）と共同で文部科学省の「平成28年度大学教育再生戦略推進費『大学の世界展開力強化事業』計画調書～アジア諸国等との大学間交流の枠組み強化～」(キャンパスアジア、事業期間5年間)の「タイプA-②」に応募した(不採択)。東アジアプロジェクトは申請書の構想を規模縮小して行っているわけである。
2. 詳しくは次の文献を参照。Pui-yin Ho, *Making Hong Kong: A history of its urban development*, Cheltenham, UK and Northampton, US: Edward Elgar Publishing Limited, 2018.
3. 仲野誠、2011「生きられる地域のリアリティー反省の学としての地域学を目指して」柳原邦光・光多長温・家中茂・仲野誠編『地域学入門-〈つながり〉をとりもどす』ミネルヴァ書房、pp.104-125。
4. 例えば、田井玲子、2013『外国人居留地と神戸—神戸開港150年によせて』神戸新聞総合出版センター。
5. このときの河川開発と構造的差別の結びつきに関する一調査記録として、稲津秀樹、2018「濁流を聞く／危機を知る—『差別の川』のサウンドスケープを歩く」川端浩平・安藤丈将編『サイレント・マジョリティとは誰か—フィールドで学ぶ地域社会学』ナカニシヤ出版、所収も参照。
6. 田井玲子、同上書、p.43
7. 新修神戸市史編集委員会、1994『新修 神戸市史 歴史編IV 近代・現代』神戸市、p.337
8. 田井玲子、同上書、p.51
9. ウルリッヒ・ベック(島村賢一訳)、2008『ナショナルリズムの超克—グローバル時代の世界政治経済学』NTT出版。
10. 何先生の講義も水上労働者の言及があったが、かつての神戸港の「はしけ」暮らし、ひいては2018年度に訪れた「戦没した船と海員の資料館」の展示内容も、この文脈で考えられるべきものだろう。こうした「オフショアの領域」をめぐる着想にあたっては、Tom Trevor, Jane Connarty and Elisa Kay, eds, 2007, *Port City: On Mobility and Exchange*, Bristol: Arnolfini. も参考にした。
11. 伊豫谷登士翁編、2007『移動から場所を問う—現代移民研究の課題』有信堂。児島明、2011「人の移動から地域を問う」柳原邦光・光多長温・家中茂・仲野誠編『地域学入門-〈つながり〉をとりもどす』ミネルヴァ書房、pp.127-149。
12. 例えば、塩原良和・稲津秀樹編、2017『社会的分断を越境する—他者と出会いなおす想像力』青弓社。
13. 真木悠介、1981=2003『時間の比較社会学』岩波現代文庫、p.324
14. 例えば、大澤真幸・塩原良和・橋本努・和田伸一郎、2014『ナショナルリズムとグローバリズム』新曜社。